

半蔀

古名

半蔀夕顔

内藤左衛門作

季は	地は	後	前
		ワキ	ワキ
		前に同じ	雲林院の僧
		シテ	シテ
		夕顔の精	女
夏六月	前は都雲林院		
	後は都五条		

「是は都紫野雲林院に住居する僧にて候。 さても我

一夏の間花を立て候。 早安居も過方になり候へば。

色よき花を集め。 花の供養を取り行はゞやと存じ候。 敬つて白す立花供養の事。 右非情草木たりといへども。 此花広林に開けたり。 豈心なしといはんや。 中んづく泥を出でし蓮。 一乘妙典の題目たり。 此結縁に引かれ。 草木国土悉皆成仏道。

シテ
「手に取ればたぶさに穢る立てながら。 三世の仏に

花奉る。

「不思議やな今まで。 草花りよようとして見えつる中に。 白き花のおのれ独り笑の眉を開けたるは。 如何なる花を立てけるぞ。

シテ
「愚の御僧の仰せやな。 黄昏時の折なるに。 などかはそれと御覽ぜざる。 さりながら名は人めきて賤しき垣ほにかかりたれば。 知ろしめさぬは理なり。 是は夕顔の花にて候。

ワキ 「實にくさぞと夕顔の。花の主は如何なる人ぞ。

シテ 「名のらずと終には知ろし召さるべし。我は此花の
陰より参りたり。

ワキ 「さては此世になき人の。花の供養に逢はん為めか。
それに付けても名のり給へ。

シテ 「名は有りながら亡き跡に。なりし昔の物語。

ワキ 「何某の院にも。

シテ 「常はさむらふ誠には。

地 「五条あたりと夕顔の。く。空目せし間に夢とな
り。面影ばかり亡き跡の。立花の陰に隠れけり。

く。
(中入)

ワキ 「有りし教へに随つて。五条あたりに来て見れば。

実にも昔の居まし所。さながら宿りも夕顔の。瓢
箪しばく空し。草顔淵が巷に滋し。

後ジテ 「藜藿深く鎖せり。夕陽の残晴新に窓を穿つて去る。

地 「愁嘆の泉の声。

シテ
「雨原憲が枢を湿ほす。

下歌地
「さらでも袖を湿ほすは。廬山の雪の曙。

上歌
「窓頭に向ふ朗月は。く。琴瑟に当り。愁傷の秋
の山。物すこの氣色や。

ロング地
「実に物すごき風の音。簷戸の竹垣有りし世の。夢
の姿を見せ給へ。菩提を深く弔らはん。

シテ
「山の端の。心も知らず行く月は。上の空にて絶え
し跡の。又いつか逢ふべき。

地
「山賤の。垣ほ荒るとき折々は。

シテ
「哀をかけよ撫子の。

地
「花の姿をまみえなば。

シテ
「跡訪ふべきか。

地
「中々に。

シテ
「さらばと思ひ夕顔の。

地
「草の半蔀おし上げて。立ち出づる御姿。見るに涙
のとゞまらず。

「其頃源氏の中将と聞こえしは。此夕顔の草枕。たゞ
仮臥の夜もすがら。隣を聞けば三吉野や。御嶽精
進の御声にて。南無当来導師。弥勒仏とぞ称へけ
る。今も尊き御供養に。其時の思ひ出でられて。
そぞろに濡るゝ袂かな。猶それよりも忘れぬは。
源氏此宿を。見そめ給ひし夕つ方。惟光を招き寄
せ。あの花折れと宣へば。白き扇の。つまいたう
焦がしたりしに。此花を折りて参らする。

シテ
「源氏つくぐ」と御覽じて。

地
「打ち渡す。遠方人に問ふとても。それ其花と答へ
ずは。終に知らでもあるべきに。逢ひに扇を手に
触るゝ。契の程のうれしさ。折々尋ね寄るならば。
定めぬ海士の此宿の。主を誰と白波の。よるべの
末を頼まんと。一首を詠じおはします。

地
「折りてこそそれかとも見め。
(序の舞)

シテ
「折りてこそそれかとも見め。

地 「黄昏に。

地 「ほのぐ見えし花の夕顔。くく。

シテ 「終の宿りは知らせ申しつ。

地 「常にはとむらひ。

シテ 「おはしませと。

地 「木綿附の鳥の音。

シテ 「鐘もしきりに。

地 「告げ渡る東雲。あさまにもなりぬべし。明けぬ先

にと夕顔の宿り。明けぬ先にと夕顔の宿りの。又

半蔀の内に入りて。其まゝ夢とぞなりにける。